

校友会運動部の社会史

－明治期男子中学校を事例に－

A Social History of Athletic Clubs at “Koyukai” (Student-Teacher Association) :
A Case Study of Boy’s Secondary Schools in the Meiji Era

安 東 由 則*

ANDO, Yoshinori

目次

1. 研究目的と対象
2. 中学校へのスポーツ導入と校友会運動部への統合
3. 校友会スポーツの拡大背景
4. もう一つのカリキュラムとしての校友会スポーツ
5. むすびにかえて

* 武庫川女子大学教育研究所・研究員／文学部教育学科・教授

1. 研究目的と対象

校友会⁽¹⁾は明治中期以降、中等以上の学校へ取り入れられた組織であり、主として雑誌発行、講談（演説）、運動などの各部から構成された。特に運動部は、運動会の開催を含むが主としてスポーツ活動を中心とする組織であり、学校を挙げて取り組まれ、学校内外から注目された活動であったといえる。

ここで取り上げる中学校へのスポーツ導入や校友会運動部の設立・発展の過程については、体育史を中心に、学校史、スポーツ史などにおいて、地域、学校単位でその経緯が明らかにされてきたが（鶴岡 1973, 平野 1974, 古園井 1978, 真栄城他 1986, 西川 1992）、全国規模でこれを扱っているものは渡辺（1978）、桑原（1988）、安東（2009）など少ない。中でも渡辺は、明治期における全国 45 中学校におけるスポーツ活動を調べ、導入されたスポーツの種類や時期を詳細に辿っている。坂下（2001）の研究は一部に中学校を含みつつも高等教育を中心に野球への言説を分析したものであり、示唆に富むが、対象が異なる。これらの研究を除けば、中学校の校友会スポーツについては簡潔に言及しているものがほとんどである（木下 1971a,b、能勢 1965）。さらに、こうした先行研究は研究の性格上、史実の確認・検討に終わっていることが多く、校友会運動部が学校内外において果たした社会的機能について十分な考察は行われていない。学校生活の華として学校内外で大きな人気を博した校友会スポーツが社会学的研究の対象とされてこなかったのは、むしろ不思議である。

本研究の目的は、まず兵式体操などを含む正課体育とは別に中学校へスポーツが取り入れられ、校友会運動部として発展していった経緯を全国規模で辿ることであり、次にその要因について考察するとともに、学校はもとより地域、国家の中でいかなる意味づけがなされ、それがいかなる機能を果たしたのかを明らかにすることである。スポーツの中学校への定着・発展を、学校による一方的な設置と奨励にのみ帰すことは無謀な議論である。校友会スポーツの発展は、生徒、教員、学校、地域あるいは国家などからの様々な関心や期待、欲望がそこに入り込み、そうした諸関数の結果として発展していったと考える必要がある。よってここでは、校友会スポーツの発展過程を鏡として、そこに映し出された学校内外からの欲望とそれらが交錯する様子を分析しようとするものであり、これにより中学校の校友会スポーツのもった多様な社会的機能、意味づけを明らかにすることができる。

また本研究は、校友会スポーツの全体的な発展経緯の把握を目指すものと位置づけており、特定地域における詳細な事例研究はその後に位置づけるべき課題だと考えている。よって分析対象は一次資料という訳にはいかず、各府県で最も歴史的に古い中学校を中心とする「学校史」⁽²⁾という二次資料であり、その中の校友会雑誌あるいは回顧録などに現

れた校友会スポーツに関する記述などである。史実の確認にとどまらず、生徒、教師、地域の人々、新聞などの声にできるだけ耳を傾けながら、分析をすすめていく。

2. 中学校へのスポーツ導入と校友会運動部への統合

明治期中学校でのスポーツ、特に欧米のスポーツは、正課の体育授業においてではなく、校友会運動部で行われた。校友会、学友会といった学内組織が作られる以前に行われていた場合も多々ある。明治 20 年頃から盛んになった運動会プログラムの中でフットボールを行う、生徒有志の自主的な組織でスポーツをする、あるいは教員が積極的にかかわる場合もあった。しかしながら明治 20 年代前半において、外来のスポーツについてはルールも分からず目新しい遊びとして行っていることが多い。この頃の北野中学⁽³⁾⁽⁴⁾の卒業生三井武三郎（明治 24 卒）が、「或日運動場の我々小僧の中へ、丸い棍棒とゴム鞠を持って来て一人二人を配置して一人が鞠を投げつけると、一人が棍棒で受止める。翌日先生が又『鞠を受止めるのではない、打ち返すのだ』と訂正された。丸い棒で丸い鞠を打ち返すのは不可能だと小僧共が苦情を言って、其遊戯はそれきりとなった。先生は舶来の書物から野球に関して読んだのであると後年に至って気がついた」（202 頁）と回想しているように、一時的な遊びで終わることもあった。本節ではまず、スポーツが中学校に導入され、校友会運動部として整備されていく過程を辿っていく。

（1）スポーツの導入とそのチャンネル

欧米発祥の近代スポーツは、明治 11 年創設の体操伝習所あるいは高等教育機関に招聘された外国人教師などを通じて日本に取り入れられた⁽⁵⁾。一方、日本各地に作られた中学校では、明治 20 年代において様々な経路を通じて西欧スポーツが取り入れられていく。

中学校への近代スポーツの導入以前においては、日本古来の柔術・剣術が取り入れられている場合が少なくない。「撃剣、柔道が行なわれるようになったのは、明治十五年からである。時の知事山田信道が、『維新以来青年子弟の文弱に流るるを憂ひ、之を矯正せん』（尚志、河崎兼松述）として撃剣、柔道を課することを命じた」（鳥取中学 97 頁）、「（明治 25 年頃）従来体操の正課で行われていた剣道（撃剣）、柔道（柔術）が課外活動として行われていた」（秋田中学 52 頁）との事例、あるいは寄宿舎生のみがこれを行っている場合もあったが、これらは藩校で行われてきた武術を中学校に取り入れたものである。しかしながら、兵式体操が取り入れられ身体訓練への関心は高まったように見えても、全体としてはまだ主知主義的な考え方が強く、身体運動への関心は低かった。明治 26 年頃の松江中学では、「当時学校の先生達はまだ運動なるものの存在を知らず、しかもそれが重要な教育の一であるなどとは夢にも思ったことなく、今の人にはまるで嘘の様な

咄々怪事と思はれる事であった。学校に在った運動用の器物は、狭い狭い学校後庭の唯一の落しっこ台、寄宿舎の庭の唯一本の金棒、船入れに繋いだ二隻の古端艇だけで、しかも指導者は無く、総て唯有志生徒が慰み半分に使用するに過ぎなかった」(299 頁)という状況であった。

明治 20 年代後半より、地域差はあるものの欧米のスポーツが徐々に中学校へも取り入れられていくが、インフォーマルであることが多く、そのチャンネルは一様ではなかった。以下、最も早く多くの中学校に普及した野球を事例に、その導入の実際を「学校史」、校友会雑誌など表れた記述から辿っていく。仙台中では「野球は当時二高で既に行われていたが、明治二十九年頃、東京から押川清氏が仙台に来てその技術を広めてから、本校でもようやく行われるようになった」(32 頁)、水戸中学においては「ベースボールを初めて本校に伝授したのは札幌農学校出身で動植物を教えていた河村九淵教諭である。原書からルールを翻訳して生徒に教えた」(119 頁)とある。その他、姫路中学では「教諭熊本謙二郎氏は、第一高等学校出身ですから、此の競技を姫路中学に持来りて生徒に教え始めた次第」(89 頁)、鳥取中学においては「明治三十年には図師崎尚文が学習院より転校してきて野球が盛んになり、この頃初めてミットを使った」(67 頁)とある。さらに鹿児島中学では「(明治三十二年) 一月二十日第一中学校に中馬庚教諭が着任した。アメリカから伝えられたベースボールを野球と訳した人物である」(52 頁)などの例があり、高等教育機関でスポーツを経験した者が教師として赴任した中学校で伝授するケースが多くみられる。

外国人教員による伝授の例もある。福岡県の豊津中学の学校史では、明治 21 年の早きより、エルマー・イー・ハツバードが母国アメリカより持ってきた野球道具や蹴球を使って宿舎生相手に放課後に練習し、これを見た近所の人々が驚いたとの記述がなされている(古園井 1978, 7 頁)。秋田中学ではすでに野球が行われてはいたが、「時の教師で、米人ハロールド・エムノック氏(三十四年赴任)による新技術の指導があった…『秋田中学回顧録』によれば『エムノック氏の技術の巧妙なるに生徒は大いに驚嘆し、自然その妙味に感じ、同氏について投球を練習するもの多数となり、漸次発展の徴候を顕し、校内にて生徒間互に競技を演ずるに至れり』」(77 頁)とある。さらに、現役の大学生が教えた事例も見られる。松江中学においては、「二十六年度、兄が京都から帰ってくるとベースボールといふ面白いアメリカの運動があるから教へてやろうと言ったので、当時中学三年であった余は、直ぐに寄宿舎を中心に若干の同勢を二の丸練兵場に動員し、そして手解きをして貰ったが、それが実に松江野球の濫觴…」(298 頁)としている⁽⁶⁾。この他、既にスポーツを行っていた中学校からの転校生の影響で始めた場合もあり、浜松中学では明治 27 年の創立後間もなく「静岡中学校より転校したる二、三の人々の指導の下に、多少技を練るに止まりしものの如し」(78 頁)、新潟中学では「明治三十一年建川美次氏が高田

中学から転校してきて野球熱を駆り立てたので急に部員も増し技術も向上した」(80 頁)とある。

以上、東京や京都などの高等教育機関でスポーツに出会った若い教師を中心に、外国人教師、さらには大学生や他中学校からの転校生など、様々なチャンネルを経由して、野球を中心にテニスなど欧米のスポーツが中学生たちに伝えられ、興味をそそられた生徒たちは熱心に取り組むようになった⁽⁷⁾。初期においては、校友会といった学校組織とは無関係に遊びの延長として取り入れられていることが多い。競技のルールも十分に分からず、道具も揃っていないが、試行錯誤しながら寄宿生や一部の生徒を中心に受け入れられていったのである。渡辺(1978)も指摘するように、実際には、教師の転出や中心生徒の卒業により活動しなくなるなど導入と衰退が繰り返される例も少なくない。

(2) スポーツの普及

表 1 に示しているように、明治 20 年代終わり頃から 30 年代において、各種スポーツは中学校に普及・定着していく。この頃より中学校の数は増え、それに伴い学校対抗試合や地域における大会も始められ、競技によっては全国大会も開催されるようになる。スポーツの中学校への浸透と対抗試合の拡大、およびスポーツに対する生徒や学校の取り組みの実際を、ここでも野球を中心に辿っていく。なお紙面の都合上、ここでは明治 19 年の中学校令により各県に一校設立された、中学校を取り上げることとする(それ以降に設立された中学校を含めた詳細なものは、安東(2009)を参照)。

北野中学では「明治廿六年四月三日本校『ベースボール』団体員と京都同志社『ベースボールクラブ』員との試合が行われ」(296 頁)とあり、これは早い事例である。水戸中学においては「栃木県尋常中学校との定期戦が始まったのは、二九年一〇月一七日のことであった」とされ(170 頁)、福山中学では「…対外試合としては、明治三一年夏の対高松中学戦を初見とする。…八月六日高松中学生徒三〇名は、職員二名に引率され、和船に乗じて手城港に着き、翌八月七日、来賓一名を迎え午前七時三〇分より本校運動場に於て試合を行った」(585 頁)としている。鳥取中学では「翌三十一年に対外試合を初めて行った。鳥取師範学校との対戦で…。三十二年五月には二十里の旅程を徒歩で中国山脈を越え、作州に侵入、津山中学と対戦して勝った。七月には津山中学が逆に遠征してきたが、再び撃破した。三十三年になると松江に遠征…」(67 頁)など、交通の便が悪い中であっても、遠い距離をものともせず対抗試合が行われ始めた。その松江中学では、「この年(明治三三年―筆者)において特筆すべきことは、学友会運動部の活動が飛躍的に活発化したことである。…五月一日、山口高等学校生徒が修学旅行で松江を訪れた。学友会野球部委員は練習試合を請うたが、さいわいに快諾を得、この日午後二時から二の丸広場で松江中学白軍と、山口高校生四名に松江中学生五名からなる紅軍との五回戦試合が行われ

た」(371 頁)とあり、対戦相手を積極的に求めている様子が伺える。愛知一中でも「三十四年二月、ベースボール部は京都に遠征し、三高運動場で京都一中を 20 対 7、同志社中学を 30 A 対 2 の大差で破碎し、三高と 4 対 4 で引き分けとなった。四月三十日には慶應義塾大学の…」(108 頁)と遠くまで出かけ、高等学校や大学との試合も行っている。

対抗試合が盛んになる中、試合に勝つため、チームを強くするため、様々な策が講じられた。「栃木県尋常中学校との定期戦が始まったのは、二九年一〇月一七日のことであった。…同年春、約束が成立すると、栃中は夏休みに上京して一高の指導を受けて練習した。これを聞いて本校も一大事とばかり九月上旬選手が上京し、同じく一高に日参し、対戦を控えて技を鍛えた」(170 頁)のは水戸中学である。新潟中学では、「四〇年八月十五日には、慶應義塾選手の吉川清、阿部喜十郎を招聘してコーチを受け」ている。「…全国各地の希望する中学校を巡回指導」するなどということも行われ、「篠田旅館の四泊の宿泊費、宿と学校の間の人力車の費用合わせて六〇円は、寄付と部員の拠出でまかなわれた」(132 頁)。

明治 30 年代中期以降、野球を中心に地方大会も開催され始める。秋田中学では「明治三十三年、時の武田知事によって、『チャレンジ・カップ争奪戦』が、県内の選手権大会という性格をもってはじめられ」(76 頁)、愛知一中では「三十五年九月、第一回東海五県連合野球大会が開催され、毎年持ち回り方式で初年度は本校で行われた」(118 頁)。前橋中学でも明治 36 年より「県立学校連合野球大会を前中運動部の提唱のもとに前中校庭で開いた。参加したのは太田、高崎、安中の各中学校及び師範学校であった」(411 頁)。明治 44 年には、「金沢医専の主催による北陸三県各学校野球大会が第四高等学校グラウンドで行われ」始め(富山中学 293 頁)、同年、山陰地方でも第一回山陰大会が始まっている(鳥取中学)。また、総合的な競技会を開催する地方もあり、「三四年、初めて中等学校の全県的な競技会が開催された。正式な大会名を『県立市立学校聯合運動会』といった。…五月二五日…県下五中学校と市立新潟商業学校、それに新潟・高田両師範学校、計八校の選手が集い腕を競った。種目は撃剣・野球・庭球・徒競走…の六種目」(新潟中学 91 頁)とあるのはその例である。高等教育機関主催の大会も開催され、中学校も参加している。愛知一中では、明治 35 年から京都三高獄水会主催の野球大会に出場しており(118 頁)、茨木中学の明治 37 年 9 月 29 日付史料(「学事年報」)には「大小ノ運動会、撃剣柔術大会ヲ開キ武徳会大会、京都帝国大学運動会、本府中学校連合運動会ニ選手ヲ出ス等、体育奨励ノ機ヲ逸セザランコトヲ力メタリ」(134 頁)との記述がなされている。

表 1. 明治期の中学校における校友会の発足とスポーツの取り入れ年表

学校名	校友会設立年と名称	年(明治)	各年におけるスポーツ活動
札幌中学 『百年史』 1997 年	明治 28 學友会	M29	演説部、遊戯部、雑誌編集部、会計部
		M35	遊戯部から武術部(銃剣、柔道、射撃、弓術)が独立 遊戯部の一つとして野球部創設(M34に師範と試合) 大弓部、ローンテニス部開始
		M41	「遊戯部」→「運動部」(遊戯会→運動会)
弘前中学 『鏡ヶ丘 80 年史』 1963 年	明治 25 校友会 明治 26 校友会会則改正	M25	会誌の発行と演説討論会の開催
		M26	運動科が設けられる(撃剣)
		M28	柔術
		M30	フットボール・ベースボール
岩手中学 『白壁校百年史 通史』 1971 年	校友会発会前 清献会、獅子吼団、 修養会等、任意団体多数	M19	東京で野球を覚えてきた二人の教師、増嶋文二郎、 多田宏綱が中学生達に野球を教えた 新築の校舎の付近で「掘石」や「投球」をして遊んで、 壁に傷をつけたり窓を破ったりする…
		M20	運動会で使用する皮球やバットを購入
		M23 頃	撃剣会という団体。学校の理解のもと稽古
		M31	仙台の第二高等学校から笠原寛美、馬場新一の二人 のコーチを招き、本格的な野球を教わった
	明治 33 校友会	M37	庭球部/M42雑部蹴鞠部/M43氷滑部(スキーとスケート)
秋田中学 『秋高百年史』 1973 年	明治 25 校友会		講演部、雑誌部、体育部(柔術、剣術、運動会)の三部 講演部：以前から弁舌を振るう場はあった 体育部：剣術、柔術が課外活動として実施 ボート(M30)、野球、脚球、庭球(M33 頃)
宮城一中 『仙台一中・一高 百年史』 1993 年	明治 30 学友会	M30	以前は同志での活動：如蘭会、健児会は有志の集まり
		M31	撃剣・柔道を一部、野球・庭球・蹴球を二部
		M36	第三部として弁論・雑誌の二部が設置された 三部制を改め、ボートを加えて 9 部になる
安積中学 『安中安高百年史』 1984 年	明治 25 同窓会	M23	ベースボール会
		M24	撃剣及弓術(志望者有志)
		M32	会津中学との野球試合
		M36	庭球(…今夏は東都慶應より撰手二名を招きて十日間 計り練習をやった) 273
		M43	柔道・剣道部そろって会津中学に遠征
水戸中学 『水戸一高百年 史』 1978 年	明治 30 校風会, 保会, 切磋会 (気風の矯正目的)	M24	野球部成立/土屋の指導による野球の始まりは 21 年頃
		M29	栃木県尋常中学との野球定期戦始まる
	明治 31 知道会	M31	講話、英語、雑誌及運動の四部を設く 運動には野球科、柔術科、撃剣科、遊戯科
		M34	柔術部の創部
		M35	庭球部の創部。周辺学校と試合
栃木中学 『60 年史』 1958 年	明治 31 同窓会	M32 頃	後校庭で野球の試合/校庭では野球と庭球が盛ん 剣道や柔道では町の道場へ通う者も多かった
前橋中学 『前橋高校八十七 年史』上巻 1964 年	明治 27 学友会雑誌発刊 同年 協研会(共研会と協同会 が合同した通学生組織) (寄宿生には矯正会)	M27	この頃野球が誕生。師範学校との試合
		M28 頃	ローンテニス、柔術などが行われるようになった 記録に残る最初の運動会「立錐の余地なし…」
	明治 35 学友会改正施行	M35	雑誌部、運動部、講演部の 3 部からなる
		M36 頃	県立学校聯合運動会開催
千葉中学 『創立百年』 1979 年	明治 24 同窓会雑誌発行 明治 30 校友会	M30	撃剣部、柔術部、遠足部、野球部、端艇部、 陸上運動部、弓術部と雑誌を発行する雑誌部
		M32	「千葉中学校校友会雑誌」初号発刊
		M35	庭球部を設置する

*：中学校名は主に、明治 30 年代半ば以降の名称。それ以降変化している場合もある。

：中学校名の下は、各学校史の名称と出版年。但し岡山中学を除く。

学校名	校友会設立年と名称	年(明治)	各年におけるスポーツ活動
東京一中 『日比谷高校 百年史』上巻 1979年	明治 23 学友会	M17-9 M20 頃 M23 M24 M27 卒 M32	AS 会創設 (アスレチック・スポーツ) 以文会 (学友会創設により解散) 文芸、武術、運動、遠足、游泳、漕艇 茶話会、雑誌部、撃剣部、漕艇部、運動部、遠足部、游泳部 「…野球、庭球はまだ尋中には輸入されて居りませんでした。 蹴球は校庭内でチラと片影を見たやうな気がします…」 運動部に競走科、ローンテニスコ、野球科を創設
東京四中 (旧城北尋常 中学) 『府立四中都立 戸山高百年史』 1988年	明治 27 学友会誌「城北」 創刊	M27-8 M35 前 M40	ボート部－隅田川の貸船屋かた特約で借り、先輩 コーチのもと練習／毎年運動会があり競争や競技 「撃剣は校庭でやりましたが、柔道は道場がなくでできま せん。テニスもダメ、水泳は危ないというのでやらせて もらえない」 強固な石と頑健な身体を鍛えるため、隅田川の水泳訓 練が始まる (水泳場開設)
神奈川一中学 『神中・神高・希望 ヶ丘高校百年史』 1998年	明治 33 校友会	M33 M35 M43	文芸、武芸 (運動遊戯其他体育に関する事業)、庶務の 3 部 雑誌部、野球部、剣道部がこれに属する 校友会誌創刊 庭球部 M40 水泳部、M44 柔道部
新潟中学 『青山百年史』 1992年	明治 27 遊方会 (生徒自らが結成)	M26 M27 M31	撃剣部創立…遊方部設立前だったので体育科に… 端艇部繋留場設置、端艇三隻…生徒最大の楽しみ ベースボール部の発会式 遊方会雑誌創刊
松本中学 『九十年史』 1969年	明治 21 創立会(卒業生が東京で) 明治 24 創立会(在校生含め)	M28 M28 頃 M30 M33 ～	雑誌「校友」の発刊 (M33「校友」再刊) 報国会に加入して専ら撃剣槍術を錬磨 日清戦争以来学生の気風大に変わり…撃剣を学ぶ 野球部の創設をみる テニスが盛んになってくる
静岡中学 『静岡高百年 史』上巻 1978年	明治 24 柔克会 明治 25 学友会 明治 29 校友会	M23 頃 M29 頃 M32 M34	野球の術…始まる M28 頃より「其技甚だ見るべきものあるに至れり」 校友会雑誌の発行始まる 水泳部 ローンテニス部
浜松中学 『浜松北高百年史』 1994年	明治 27 頃 運動会 明治 30 頃 校友会	M27 M27 M30 頃 M30 M31	剣術：創立より寄宿舎で剣術が行われていた 野球：「静岡中より転校したる二、三人の人々の指導 の下に、多少技を練るに止まりしものの如し」 校友会雑誌発行 愛知一中との試合 「未だ一定セル仕合規則なく其不便一にして足らず」 撃剣、柔術、弓術、野球、雑誌／雑誌発行、遠足、茶話
富山中学 『富中高百年 史』 1985年	明治 27 文武会 明治 32 文武会解散 (校長と生徒との対立による) 明治 33 文武会復活	M27 M28 M28 M36	柔道が新任教師とともに取り入れ／撃剣もこの頃 ベースボールの校内試合／「文武会誌」発行 フットボールも加わる 体操科の一部として剣道 (M27) 柔道 (M28) 短艇部 (M38 に文武会へ)
金沢一中 『金沢一中・泉丘 高校百年史 後編』 1993年	明治 31 校友会	M29 M31 M32 M34 M41	第一回陸上運動会 講談部、運動部、編集部の 3 部制 校友会誌 学芸部、武道部、運動部、会務部の 4 部制 武道部に柔道、剣道、弓道、運動部に陸上運動、水上運動 陸上運動部を野球及蹴球部、庭球及遠足部 水上運動部を端艇部、泅水部

学校名	校友会設立年と名称	年(明治)	各年におけるスポーツ活動
福井中学 『百三十年史』 1988年	明治 32 興風会	M32	野球部、庭球部、弓術部を設置／随意科として柔道科新設
	明治 41 校友会	M41	校友会規則を制定
		M43	校友会誌「明新」発刊
愛知一中 『鯉光百年史』 1977年	明治 26 学友会	M27 ~	戦争の影響で撃剣、柔術を学科として全生徒に… その後衰微 (M44 ~ 正課となる)
		M32	外国人とのローンテニスの試合
	明治 33 学友会規則 (運動部に重点)	M34	ベースボールは京都に初遠征
		M34	端艇部創設
		M36	質実剛健を旨とする校長訓示、運動奨励
岐阜中学 『岐高百年史』 1973年	明治 20 運動会	M20	運動会にてフットボール行われる
	明治 27 運動部と改称?	M27	第一回の撃剣大会、ベースボール大会
彦根中学 『彦根東高百二十年史』 1996年	明治 23 芹陽校友会		
	明治 27 崇廣会	M27	演説討論部、雑誌部、撃剣柔道部、陸上運動部、 水上運動部を設けた／「崇廣会雑誌」を発行
京都一中 『京一中洛北 高校百年史』 1972年	明治 37 校友会 (改称)	M37	陸上運動部が野球、庭球、武術部へ (庭球部創設)
	明治 25 融和・修練の組織あり-無名		
	明治 27 学友会	M27	運動会：演武会、陸上運動会、水泳及漕艇
		M28	漕艇部の新設
北野中学 『北野百年史』 1973年		M29	底球部 (今の野球部) の新設・対外試合も
		M24	熊本謙二郎が着任し一高直伝の野球を教示
	明治 25 校友会	M25	「自然発生的クラブ活動の盛行に伴い、そそれを包括 し、秩序づける組織が必要になった。」職員会で生徒 の意向を考慮して規則作成／文芸・武術・運動の三部
		M26	武術や漕艇、ベースボールなどが盛んに／フットボール現れる
	明治 32 校友会会則改正		
茨木中学 『茨木高校百年 史』 1995年	明治 28 体育会	M28 ~	大運動会、小運動会
		M32	柔道はじまる
	明治 44 有信会 (改称)	M34	フットボール及びローンテニスマッチを行う
姫路中学 『姫中・姫路西高 百年史』 1978年	明治 26 校友会	M22	フットボール：「既にやっていました…ルールというものはなく混戦乱闘」
		M21 頃	野球：「一高出身の熊本謙二郎氏が赴任…英字引片手にて 生徒に教えたるものです」
	明治 20 代中頃 同窓会		
	明治 20 代後半 交友会	M24	「小森校長がきてからベースボールやテニスが流行しかけてきた」
		M25	庭球：「前波先生が…紹介された。本を読みながら指導された」
鳥取中学 『鳥取西高百年史』 1973年	明治 33 年頃 生徒間紛議で再編成		
	明治 22 校友会	M15 ~	撃剣、柔道が行われるようになる
		M29	野球部創設
		M30	学習院からの転校者により野球盛んに
		M30	校友会雑誌創刊
	明治 32 校友会 (刷新) (従来の会が「萎微寂寥日々 渾沌の域に埋没せられん」状 態となったので新たに校友会)	M31	野球の対抗試合始まる
		M32	従来の校友会雑誌に代えて「鳥城」発刊
松江中学 『松江北高等学校 百年史』 1876年		M35	運動部規則の改正：第一種：撃剣、柔道、 第二種：ベースボール、ローンテニス、三種：ボート、水泳
		M16	「海軍省払下げの如き二人並び六人漕ぎ式のカッター であったにせよ…湖上の一隅に認めることができた」
	明治 19 同窓学生会	M23-8	「討論演説に大部分の時間を費し、其他雑誌発行、ボート競 漕などが主なる会の事業であって、今日の如く、テニスだ のベースボールだのと云ふ西洋流のものは全然なかった」
		M26	ボートがスポーツの中心で、宍道湖夜行一周
	明治 30 学友会	M33	初めて野球で県外中学との試合 (鳥取一中と) 修学旅行でやって来た中学との試合も
		M34	校長「大いに体育の奨励を計らん」、運動盛んに
		M34	武徳会第一回端艇競漕会に出場 浜田中学との撃剣柔道試合

学校名	校友会設立年と名称	年(明治)	各年におけるスポーツ活動
岡山中学 後神俊文 『岡山中学事物 起源覚書』 1988年	明治19 尚志会 明治29 会則改定	M19 頃 M27 M29	毎月一回運動会、毎月一回演説及討論会 野球は行われたが尚志会の活動としてではなかった 端艇は尚志会で管理したものの不完全 「武術の萎微振はざりしは、事情の然らしむる処にして…」 この頃から、撃剣、柔道、野球、短艇が盛んに「旧来 …生徒の一大団結にして教師とは常に折合悪しく」
福山中学 『誠之館百三十年 史 上巻』 1988年	明治13 演舌会 明治14 修身演舌会 明治26 校友会	 M26 M28 頃 M31	(自由民権運動の最盛期、生徒からの申し出による) (反政府言論の影響を心配してか「修身」をつける) 文芸、武技(撃剣・柔道・弓術等)、遊技(ボート・ ベースボール・陸上運動等)／校友会雑誌の発刊 校内演技として遊技部ベースボールや武技部撃剣試合 ベースボール、撃剣などの対外試合始まる
広島一中 『広島一中国泰寺 高百年史』 1977年	明治27 同窓会／後、中断 明治29 同窓会(発会式) 明治34 校友会(同窓会改称)	M25 M27 M29 M34	野球会の組織(M29に同窓会に位置づけられる) 撃剣が始められる(M29に同窓会に位置づけられる) 文芸部と「鯉城」の発刊 校友会は七部(短艇、球技、剣道、柔道、雑誌、談 話、事務の各部)からなる
徳島中学 『徳島中学城南 高校百年史』 1975年	明治29 運動会 明治31 校友会 明治33 同志会	M30 M33	修学旅行先で中学生の野球を見て帰校後始める 雑誌部、漕艇部、撃剣部、競技部・水泳部を設け、 新たに柔道部、講話部を設けた／野球の対外試合も
高知一中 (後、城東中学) 『高知追手前高校百 年史』 1978年	明治22 校友会 (在校・卒業生の親睦) 明治30 同窓会 (在校生のための組織)	M22-3 M25 M28 M35	札幌農学校出の内村達三氏・・野球の手ほどき 「ストライキの後、千頭校長が生徒の士気を鼓舞する ために相撲、撃剣、ボートなどを奨励」、「校友会もこ れに和して毎年総会の後で、教職員、生徒らとともに 競漕会を開くのを恒例とした」 「不相変ベースボール大ニ盛ニシテ本日ノ如キ十二時ヨリ 四時迄、食后ヨリ七時半迄之レヲ為ス」 野球部誕生
福岡県立中学 修猷館 『修猷館二百年史』 1985年	明治25 修猷館校友会 明治28 修猷館同窓会 明治35 同窓会雑誌部新設	 M27 M29 M35	雑誌発行「館友会雑誌」 生徒間に協友会、蛍雪会、同志会などの自由組織 修猷館同窓会第一回大会(陸上運動会実施) 既に柔道、剣道、陸上運動、野球、庭球の各部を設置
熊本中学 『熊中熊高八十年 史』 1986年	(明治33 熊本中学と済々黌に分裂) 明治34 運動会 明治36 講文会 明治38 校友会	M26 頃 M34 M36 M38	全校生徒放課後毎日一回は撃剣、一日は体操を課し 長距離競走／散歩 運動会に撃剣、器械体操、フットボール、ベースボ ール、テニスの各部を設ける 国漢、英語、詩吟、軍歌、図書、雑誌の六部を置く 構文会の組織と雑誌「江原」の発刊 文芸部、武術部、運動部
済々黌 『済々黌百年史』 1982年	明治34 奨学部・運動部	M34 M36	運動部は撃剣柔道と戸外遊戯からなる 撃剣、器械体操、テニス、フットボール、ベースボール各部を置く 校友会雑誌「多士」創刊
宮崎中学 『創立九十周年記念 誌』 1980年	明治29 望洋会	M30 M33 M34	運動部、撃剣部 「雨天にあらざる限りは、昼食後可成運動場に於て遊戯運動をな すものとす」／その種目：ローンテニス、野球、フットボール 望洋会雑誌に猛省せよと題して全校生に呼びかけ 柔道部創設され、運動部は端艇、撃剣、柔道の三部に
沖縄中学 『養秀百年』 1980年	明治27 学友会 明治28 同窓会 明治31 同窓会更正復活	M25 M27 M33 頃 M35 M40	撃剣の実施(警察教師を招いて) 修学旅行において三高で野球試合を見学し、土産に ボールやバットをもらって帰る 野球チーム組織される 碇泊中の米国巡洋艦の水兵たちと試合 柔道が教育に取り入れられる

全国大会も開催されるようになったスポーツもある。日清戦争が終わる明治 28(1895)年、「武術を鍛練して武徳を涵養し以て神霊を慰め」ることを目的として大日本武徳会が設立され、武術の全国大会が開催されるようになる。「…専ら武術を以て心胆を練磨し廉恥を重んじ節義を励み一朝有事の時に当りては君国の為め死羽毛の如き精神を養成し以て国家の元気を振興せんとする在り之を約言すれば武徳を涵養して和魂の美を発揚するに外ならず」(木下 1971a, 182 頁)というように、日清戦争後の国威高揚の中で、身体及び精神の鍛錬のためとして武道が奨励された。また武術については、従来の武術としての柔術から、精神性を重視した近代スポーツとしての柔道への転換が嘉納治五郎らによって図られ始めたのもこの頃である(井上 1992)。

この他にも野球に限らず、様々な大会が開催され始める。例えば、明治 30 年には琵琶湖で競漕大会が開かれ、学校 16、実業団 15 が参加した(今村 1963, 490 頁)。漕艇(端艇)は「戸外遊戯の感覚で、勇壮なボートや在来武術を採用する中学校や師範学校は、歩兵操練の実施と平行して増加」し、富国強兵主義に基づく「海国日本」との位置づけの中で、漕艇・端艇は「啻に体育上必要なるのみ」ならず、「真に国家の富強を増進する」「海国民適当の遊戯」(木下 1971a, 147-8 頁)などと奨励され、盛んになっていった。さらに明治 34 年には時事新報社や大阪毎日新聞社が主催する競歩や競走大会が開かれるようになり、明治の終わりには競泳や庭球の大会も始まっている(今村 1963、日下 1996 など)。

3. 校友会スポーツの拡大背景

校友会スポーツの隆盛は全ての学校で同時に起こったのではなく、学校による温度差も確かにあった⁽⁸⁾。しかしながら、多くの学校で比較的短期間に広がっていったのも事実である。この拡大背景には、学校内外のどのような要因が絡み合っているのか。

(1) 学校によるバックアップ

まず、学校内の要因から取り上げていく。先に見たようにスポーツが取り入れられた経緯は様々であり、初期においてスポーツへの関心をもったのは一部の生徒にすぎず、そこに学校側からの後押しがなければスポーツの広がり、発展は不可能であった。

教師によってもたらされたスポーツであれ、大学生や転校生の影響で広まったスポーツであれ、生徒らの自主的活動としてだけであるならばその発展は保証されず、実際、中心的な教師の転出や生徒の卒業によりそれが途絶えてしまう例は少なくなかった。あくまで仲間内の活動であって、組織化されていないので、後輩に伝えられない。また、欧米から入ってきたスポーツのルールも十分に伝わらず、道具も高い金額を出さねば入手できない

などの大きな障害が横たわっていた。スポーツの継続、発展には、スポーツ組織の整備や維持、器具・道具を準備できる予算の計上、あるいは運動場など施設の整備など⁽⁹⁾を必要とし、それには学校を挙げてのバックアップが不可欠であった。日清戦争中あるいは後において、教育雑誌などには日本人の体格の貧弱さが強調される一方、体育や衛生を向上させて、身体ばかりか精神を鍛えようと、「健全な精神は健全な肉体に宿る」、「ワートルローの勝利はイートンの運動場にあり」などの西欧の諺も多く掲載され、スポーツの振興が叫ばれた。こうした中、学校ではスポーツの奨励が積極的に行われるようになる。

同時に、積極的に運動クラブを学校の管理下に置き、利用しようとする学校側の意図もそこに見出すことができる。その大きな理由は、学校騒擾などに見られる学校内部での対立の解消や生徒管理があったと考えられる。明治 20 ～ 30 年代の中学校では、まだ生徒管理は不十分で、学校内での教師と生徒の対立はもとより、生徒間の対立が多々見られた(寺崎 1971 など)。「創立以来各種の団体対立し…相互連絡の必要を感じたるより」(17 頁) 校友会を創設した弘前中学などの例もある。地域間のいがみ合いが生徒にも投影される、活動ごとあるいは通学生と寮生など各種団体が対立し合う、卒業生による干渉といった構図は、多くの学校に存在した。こうした中で学校側は、対立の温床である既存の各種団体を、校長を会長とする学校管理下の校友会に取り込む、あるいは校友会を編成し直しスポーツを行わせることでそうした対立を解消し、生徒を管理しようとした。例えば水戸中学では「鬱勃たる青年の元氣は何等かの因縁を求めて發せざるを得ず彼等は教師を虐待め藝妓に惚け又た全級擧つて課業をやすみて公園附近を逍遙する等内在の元氣を發露するの途を求めて止まざりき」というので、「生徒の元氣を鼓舞するは運動の奨励に若く無き」(三島 1910,66-67 頁) として組織的に野球の伝授を始めた。静岡中学では、「二つの“会”は、杉原校長から吉田校長に移る明治二九年に廃止され、一一月三日に代わって校友会を組織し、柔術・剣術・弓術・野球の四部において、生徒は少なくともその一つの部に入ること」(260 頁) とし、川田校長時代の明治 33 年には「体育ニ関シテハ、校友会各部ノ運動ヲ奨励スルハ言フマデモナク、四部ノ内孰レカ一部ニハ、必ズ出席精勤スベキ義務ヲ負ハシメ、欠席多キモノニハ操行点ヲ減ズル制裁ヲ加ヘ、以テ之ヲ督励セリ」(134 頁) としており、生徒を強制的に運動部に参加させ、生徒の秩序づけを図ったのである。

(2) 学校外の要因—スポーツ大会開催、新聞の後援

スポーツの広がりには、学校外からの促進要因も働いていた。スポーツ試合は、生徒・教師ばかりでなく、地元の人々の関心も高かった。娯楽が少ない当時、特に地方において、地元における「エリート」の象徴である中学校という特別な場で行われる「舶来」のスポーツは、地域の人々にとって興味深い対象であり、大きな関心が向けられていく。そこには人々の好奇心、楽しさ、興奮を提供してくれる娯楽性があった。各地には地域間に

おける対抗意識が色濃く残っていた当時、他の中学校との対抗戦は、他地域に対する対抗意識をかき立てる一種の地域対抗戦といった様相を呈することも見られた。県立学校の連合運動会や野球大会、山陰や東海など広域地域での大会、さらに三高主催の野球大会や大日本武徳会大会などが、明治 20 年代末から 30 年代に広がっていったことは先に見たとおりであるが、そうした中で学校を越えて地域の人々の間にもスポーツ、地元中学校への関心は高まっていった。周りから中学スポーツに熱い期待が送られ、生徒や学校もこうした期待を意識するといった相互作用、相乗効果の中で、スポーツは生徒や教員の意識の中にも、校友会組織の中にも、着実にしっかりと植え付けられていく。

さらには、「(明治 33 年－筆者) 松江中学野球部は鳥取一中と、はじめての県外中学校との試合を行った。山陰新聞は、この挙に協賛し、勝者に記念メダルを贈呈することを決め、野球競技の解説を続け」(371 頁) など、地元新聞もこうしたスポーツ試合をよく取り上げた。野球に限らず、対抗戦前からスポーツのルールを解説する連載をする、大会を主催して表彰をするなどの工夫をして人々の関心をしっかりと惹きつけ、それを機に部数の拡大を狙うという戦略をとったのである。スポーツに対する人々の関心の高さにメディアが着目し、地方新聞は地方大会を、大新聞社は全国大会を催すなどしてスポーツのバックアップを行い、それによって人々の興味がさらに高められるという循環が形成された。生徒のみならず学校もこうした盛り上がりを意識し、よりスポーツに駆り立てられていく。

(3) 国家による体育奨励

スポーツの拡大は、国家による体育振興政策とも重なる。明治 20 年代後半から 30 年代にかけての中学校では、病気などによる中退者が多いなど生徒身体の脆弱さが懸念されるとともに、日清戦争後には身体鍛錬の必要性などが叫ばれ、正規授業の兵式体操以外にも心身の鍛錬を行う機会が求められるようになった。明治 31 年には、帝国議会で「體育奨励の建議」が可決され、国家挙げての健康な身体づくりが目指されるようになる。こうした流れの中で校友会スポーツは、学校教育の中に積極的に位置けられ奨励されていく。

「體育奨励の建議」では「學校の内外、學校には限らぬ、又老幼を問はず男女を問はず貴賤貧富を論ぜず廣く國民一般の體育の事」を述べつつ、「就中一日も忽諸にすることの出来ぬのは學校生徒の體育の事」(安部 1932, 335 頁) として学校での体育・スポーツを奨励した。実際、北野中学校では「國運の消長は…其國民が體格の強弱、亦大に之に與れるものなることを思惟せよ、又國民が體格の強弱は、啻に其當代のみに止まる者に非ずして、延て後昆に及ぼすものなることを思へ」(大阪府第一尋常中学校校友会 1899,4 頁) とする論説が校友会誌に掲載されている。また、日露戦争後の明治 38 年に出された訓令「戦後教育上ニ関シ当局者留意方」では、「教育ニ当ル者ハ學校ニ於テハ勿論學校外ニ於テ

モ一層注意ヲ加ヘ益益体育ヲ奨励シ以テ知育德育ト併進シテ決シテ偏輕ナル所ナカラシメンコトヲ要ス」(竹之下他 1983, 70 頁)として、さらに学校を中心とした体育振興を唱えた。学校体育・スポーツの振興はもちろん、それを通して体育、スポーツを一般の人々に浸透させ、国家あげての体育振興による頑強な身体づくりを進めようとする政策であり、学校スポーツは国民体育振興の拠点として位置づけられた。

以上のように、校友会スポーツには学校の内外から実に多様な関心が向けられ期待がかけられ、そうした期待を取り込むことで校友会スポーツは発展していったのである。

4. もう一つのカリキュラムとしての校友会スポーツ

校友会スポーツは、中学校の中に extra-curriculum として位置づけられたのであるが、ある意味で正課カリキュラムよりも生徒たちには親しまれ、影響力をもったともいえる。さらに、校友会スポーツは正課のように明確な目的を持たない分だけ学校内外からの多様な欲望を吸収し、生徒への影響を行使しうる hidden-curriculum としても位置づけられる。ここでは、そうした特性を持つ校友会スポーツが、生徒に対して果たした機能を検討する。

(1) 生徒のエネルギー発散とエリート意識の形成

スポーツというゲームはルールの固まりであり、暴力的エネルギーを絡め取り発散させる合法的装置ともいえる (Elias 訳書 1995 など)。スポーツというこれまでは大いに異なる「舶来」の身体運動を得るとともに、主知主義の呪縛から徐々に解放されていった生徒たちは、スポーツによってその若いエネルギーを沸き立たせられると同時に発散させる合法的な方途(型)を得たのである。

周りの誰も行わない「舶来」のスポーツなる目新しいものを行うこと自体に生徒たちは価値を見出した。また、若い教員や大学生などによって伝えられることが多かったスポーツは、目新しさと同時に、生徒たちに憧れを抱かせるものでもあり、生徒たちが積極的に舶来スポーツに飛びついていった側面がある。さらに、スポーツを行うにはルール理解をはじめ、貴重な道具の購入、それを行う場所の確保といった制約もあり、スポーツは中等以上の学校でしか行えない独占物であった。よって娯楽の少ない当時、スポーツの試合には学校内のみならず学校外の一般の人々も見物に訪れ、高い関心を示したのであり、スポーツを行うことは地域エリートである中学生の享受しうる特権となったのである。周りからの高い関心や憧れは彼らのエリート意識を満足させ、さらに他校との対抗戦という晴舞台が用意され拡大していくと、多くの観客の前で自分たちしかできないスポーツを行うことは、あるいは学校のメンバーとして応援することさえも、エリート意識を強くさせた。

(2) 学校への愛校心、忠誠心

明治 30 年代から同一県内に複数の学校が成立し、学校対抗の試合が行われるようになる中で生徒のまとまり、愛校意識が求められるようになる中で、学校側の欲求を満たす手段としてスポーツは格好のものであった⁽¹⁰⁾。生徒側が主導権を握っていた校友会などでも次第に学校主導へと変化していき、学校側を主体として整備が始められていく。

明治 29 年の水戸中学では対抗試合のため「学校では生徒大会を開いて応援を決め、先遣隊五〇余名が一〇月一五日夕刻、測候所の広場に集合し、徒歩で一路宇都宮に向かった。大部分の生徒は翌日汽車で行き、先発隊と合流し、会場の旧城趾公園に赴」(170 頁)き、明治 35 年には浜松中学が名古屋で試合をして帰って来た際、「夜半の列車に乗りて部歌勇しく帰浜すれば停車場内職員校友初め町内有志者を以て埋め互に祝し祝されつ校長一場の演説に我校万歳三唱」(112 頁)と校友会雑誌に記されているように、対抗試合は学校をあげての一大関心事であった。試合を通じての高揚感、校友会雑誌の生徒の作品によく現れている。明治 42 年の松本中学の校友会誌『校友』二八号では、「運動が精神鍛錬の上に、一致団結の気風を養成する上において、及ばず影響の至大なるを思はずなるまい。此故に運動の消長如何は、其校の意気の如何を示し、其の校の全体を通じての如何を、推察せしむる唯一の材料である。我校の県下の覇たる所以は、実にこの運動部に負ふ所も又大なるといふべしである」(220-21 頁)などと、運動部の消長がその学校の一一致団結の指標であるかのように唱われた。多少の誇張はあれ、校友会スポーツはその学校の顔であり、試合への高揚感を通して学校への愛着を高め、団結のシンボルとなった。学校、生徒の双方ともスポーツを仲立ち・求心力として団結力を強めたのである。

(3) 従順さの注入

学校内諸団体の対立、学校騒擾などが生じる中、運動部は学校側にとって生徒管理の手段ともなった。先に見たように、生徒に運動活動への参加を強い、操行点などをつけて管理しようとする直接的なものもあれば、スポーツの応援に駆り立て愛校心を煽ることで間接的にコントロールしようとする場合もある。ともあれ、校長ら管理者たちはスポーツを身体訓練としてはもちろん、あるいはそれを通して気象・精神の鍛錬に重きを置き、生徒が私利を捨て全体に尽くすように期待している。松本中学の校友会雑誌『校友』の記事には、「松中健児が、偉大なる理想に向かって踟躕なく、顧頒なく、不断に向上し発展せんとするには、その意気と精力とを運動部に養わずして、亦何に求めることができよう。…飽くまでも選手は自己の責任を自覚して、その戦ふや正々堂々、勝を制するや堂々たる態度の、よく日本武士道の精神を掬んだもの」(221 頁)とその精神性が強調されている。また済々黌黌長は明治 36 年の校友会雑誌の中で、「西哲云へり、活発なる精神は健康なる身体に宿ると。信なる哉言や。吾々は学にいそしむと共に、体を練ることを勉めざるべ

からず。嗚呼。此覚悟なかるべからず。…運動の種類多々あるあるべしと雖も、中に就いて最も適度に、最も愉快に、紀律正しき運動を撰ばず、野球庭球に若くものなかるべし。而も是等の運動は、又間接的に精神をも練るを得べし。此の点は実に野球庭球の特長の点なりとす」(217 頁)とし、野球などを例に挙げて紀律正しさや精神性をそれに求めたのである。さらに、富山中学の『文武会誌』(明治 44 年)に生徒が書いた「体育上に於ける野球の価値」という一文では、「最も吾人の体育及び精神修養に好適せるは野球技なるべし」(297 頁)とし、ユニフォームによって一致団結を高め、身体とともに、「神心」の練磨、敏捷な決断力の育成、「弱点観破」の眼力養成を行うものとした。だが、こうした学校によるスポーツの奨励は、身体訓練を通じて生徒たちのエネルギーを学校や教師への反発や学校内での集団間の抗争から逸らさせ、そのエネルギーを学校内でのスポーツという一定の安全な方向に向け、規律を内面化させることで、エネルギーのコントロールしようとする一種の「ガス抜き」として捉えることもできよう。

5. むすびにかえて

以上述べてきたように、野球に代表されるスポーツは確かに生徒管理の道具としても利用され、生徒に大きな影響を与えたが、それが学校にとって望ましい効果を挙げたとは限らない。明治 30 年代そして 40 年代に入っても学校騒擾は頻発し、選手制度などを中心とする野球批判も新聞などを賑わせ、明治 40 年には文部省も調査に乗り出した⁽¹¹⁾。導入されたスポーツに注がれたエネルギーは周囲から煽られて高まり、学校管理者の狙いとははずれた方向にほとぼしり始めたのである。しかし狙いからはずれるといっても、対抗戦に勝つための方策として選手制度をとるのは必然であり、勉強よりもスポーツに熱中することは無理からぬことであって、そこにスポーツの魅力があった。管理者が従順さや団結、精神性を鍛錬する「手段」と勝手に見なしたスポーツは、生徒たちにとっては野球自体が「目的」であり、「野球家の脳中には常に外敵という観念があつて敗を取れば、ただに己等の不名誉のみならず校の名に関するといふ所から、熱心に励むのである」(浜松中学 112 頁)などと周りから大きな期待をかけられ、加熱するとき、新たな問題が生じるのは必然といえる。結果として吹き出した過剰なエネルギーに対し、特に新聞など学校外部からのバッシングが強まっていった。それだけ野球というスポーツが人々に受け入れられ、注目されていた証拠でもある。一連の野球批判を連載してきた東京朝日新聞は、明治 44 年 8 月、全国の中学校校長宛に「野球と教育の関係」についての現状調査を行い、対外試合の利害、身体上の問題、学課成績の可否、品行、柔剣道との優劣、費用の 6 項目を尋ね回答を求めた(富山中学 295 頁、東京朝日新聞 1911 年 9 月 12 日付)。その翌年、富山県中学校校長会議では野球全廃案が提出されるなど、各地で野球の問い直しがなされ

始めた。

その結果、校友会スポーツは新しい段階に入っていく。即ち「教育的」という名の統制を強め、その名の下に飼い馴らされるようになっていったのである。「団体がただ百分の一の天才を養成する機関と変じて、なおこれを体育奨励の方法と言えるかどうか」（柳田 184 頁）という選手制度の問題、あるいは金銭や身体の問題、学習への影響など指摘された諸問題は、生徒にとって野球などのスポーツが「教育的」かどうかといった視点で論じられ、そうでなければ「教育的」な、即ち正当な価値を有するものにしていこうとする視線が学校の外側から強力に注がれたのである。これまで心身の錬磨、団結心の獲得などと意味づけはしてきたものの、実際には生徒たちに任せていたスポーツを、学校あるいは外部からの視線が介入することで「学校教育」の一環として捉え直し、「教育的」な観点から作り替えられるようになったといえる。一連の野球批判はそのターニングポイントとなった。そうして野球批判を執拗に行った朝日新聞は、大正 4 年から「教育的」な目的の下に全国中等学校優勝野球大会の開催を始めるようになる。

注

- (1) 名称としては校友会の他、学友会、文武会、あるいは同窓会など様々である（表 1 参照）。構成員も教員と生徒とからなることが多いが、初期においては卒業生と在校生を中心とするものや寮生・通学生別の組織、活動内容別あるいは地域別に構成された生徒のみの組織も見られた。会への参加は義務づけたものから比較的自由度の高いものまで幅広い。目的としては「文武諸技芸を攻究錬磨して德智体三育の発達を幫助し兼て会員の厚誼を厚くすること」（北野中学 286 頁）、「生徒ノ徳性ヲ涵養シ智識ヲ琢磨シ身体ヲ強壯ニスルコト（愛知一中 63 頁）」など三育（智・徳・体）の促進や会員相互の親睦といったものが多い。

本稿ではスポーツを中心に上げるが、校友会の「生徒自治」の側面に着目した研究も見られる（市山 2003）。

- (2) 全国的な動向を調べようとするとき、一次資料の踏査には限界があり、「学校史」を利用することとした。また、「学校史」は二次資料ではあるが、その信頼性は決して低いものではない。しかしながら、各「学校史」は編集の仕方や史資料などの制限により、校友会活動を詳細に記述しているものもあれば、ごく簡単な記述しかされていないものもあって、その取り上げられ方は様々といった資料の限界もある。こうした「学校史」の限界を承知した上で、分析を進めていく。
- (3) なお、中学校の名称は明治期を通じてよく変えられているので、ここでは明治 30 年代中期以降の安定した名称を使用する。よって、年代と校名が一致していないこともある。

- (4) 学校名を記している引用文は、全て学校史からの引用である。学校史の書名については数が多いので、紙面の都合上「引用・参考文献」には掲載せず、「表 1」中に書名と出版年を掲載し、本文中の引用においても出版年を省略している。なお、岡山中学については、後神俊文『岡山中学事物起源覚書』（1988）を参照に作成した。
- (5) スポーツの導入は大学など高等教育機関において始まった。明治 10 年の東京大学での運動会、札幌農学校でのスポーツ大会など、主に外国から招聘されていた外国人教師が教える場合が多かった。また、外国人スポーツクラブの影響も指摘されている。（今村 1963, 1989、渡辺 1973, 1976、富岡 1995 など）
- (6) 野球の他にも、「京都大学の生徒が二、三人、鉄道敷設の測量演習のため来ていまして、その人達が中学校の運動場へきて、テニスをしきりにやるので、生徒が皆まねるようになった」（219 頁）との例が松本中学で見られた。
- (7) 次に挙げる徳島中学の例は、ここに挙げた様々な要因が絡まりあっている。「徳中生が野球の実際演技を見学したのは、明治三十年…大阪・岡山・高松方面への修学旅行の旅先でのことである。県外の中学生在が野球をやっていることに刺激された徳中生たちは、帰校後野球の研究をはじめた。…林豊太郎の弟さん（当時岡山医専在学中）に依頼して、野球規則書を取寄せ研究」を行い、「林教諭の東京出張に際し、野球ボール三個を買ってきてもらい、練習を始めた。…この頃、高師出身の若い西山教諭が赴任して来て、熱心に奨励した。運動嫌いの当時の徳中生たちも次第に野球にしたしみはじめ、道具もようやく完備した明治三十二年頃から、クラス対抗や渭東・内町・富田の各クラブの野球戦が盛んとなる。」さらに「その頃、電灯会社へ実習のために来県していた工科大学三年…氏（一高の名一塁手…）に指導を仰ぎ、猛練習の結果、その技術は大いに向上した」（75 頁）。
- (8) 東京府立四中の第一回卒業生（明治 35 年卒）は、「撃剣は校庭でやりましたが、柔道は道場がなくてはできません。テニスもだめ、水泳は危ないというので、やらせてもらえない」（64 頁）、明治 43 年卒業生も「体育の方面については、もっぱら柔剣道が奨励され、軍事教練も盛んであったが、戸外運動としては、わずかに器械体操と庭球が許されていて、他校では行っていた陸上運動会や野球などは一切禁止であった」（667 頁）と語っている。
- (9) 明治 20 年代の中学校では、「時々師範学校のチームと仕合いを今の前橋公園グラウンドで行った。グラウンドと言っても真ん中を川が横ぎって居て草茫茫だから時々ボールが行方不明となる。ランナーは進塁の都度川を跳び超える始末」（前橋中学 275 頁）という学校もあるなど、スポーツができる環境は十分でなかった。運動場や施設が整備されるのは、明治 32 年に「中学校編成及設備規則」が出され、二千坪の運動場や室内運動場の整備が規定されてから本格化する（谷釜了正 1981, 今村

1963, 491 頁)。

- (10) 柳田國男は「この対抗運動ほど、群の興味を集中させ、団結の意識を鞏ならしめ、従って各員に最も快活なる服従を受諾せしめる手段はなかった」(1976, 191 頁)とした。
- (11) 野球に対する批判は以前からあった。明治 26 年の時点でも「…『野球に関する一切の世話、応援に専心し、遂には自宅を野球クラブにした程』…このような過熱状態には学校も手を焼」くなどの問題があり、「『本日、ボールヲ弄スルハ放課後ニ限ルヘキコトヲ揭示ス』とあるように休憩時間中のベースボールごっこを禁じ」(北野中学 295 頁)たり、費用の問題も指摘されていた。明治 39 年頃には「…近時学生の運動熱熾んに興り、各所に其競技の盛んに行なはるると同時に、又嫌悪すべき一種の弊風を醸し来れり。彼の野球の如き身に高価なる運動服をつけ、足に白き編上靴を纏ひ、口に土方にも劣れる野卑の語を発せざれば、競争が出来ざれば寧ろそを廢するに如かず」(松本中学 220 頁)などの批判が校友会雑誌に掲載されたり、校長との意見の対立(静岡中学)、審判の判定をめぐるトラブルや応援団の乱暴(秋田中学)が各地で生じるなどして、野球への批判が増していく。

引用・参考文献

- 安部磯雄編 1932, 『帝国議會・教育議事総覧 一第一議會より第十二議會まで一』厚生閣。
- 安東由則 2009, 「明治期における中学校校友会の創設と発展の概観」『研究レポート』(武庫川女子大学教育研究所) 39, 31-57 頁。
- Elias, Norbert & Dunning, Eric 1986, *Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process*. Oxford, Basil Blackwell. (大平章訳『スポーツと文明化』法政大学出版会 1995)。
- 平野稔 1974, 「大分県における明治体育史の研究—中等学校のスポーツについて—」『大分大学経済論集』26 (4), 61-97 頁。
- 広田照幸 1992, 「戦前期の教育と＜教育的なるもの＞」『思想』821, 253-272 頁。
- 市山雅美 2003, 「旧制中学校の校友会における生徒自治の側面—校友会規則の分析を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』43, 1-13 頁。
- 今村嘉雄編 1963, 『体育史資料年表』不昧堂。
- 今村嘉雄 1989, 『修訂 十九世紀に於ける日本体育の研究』第一書房。
- 井上俊 1992, 「『武道』の発明—加納治五郎と講道館柔道を中心に」『ソシオロジ』115, 111-125 頁。
- 木下秀明 1971a, 『日本体育史研究序説』不昧堂。
- 木下秀明 1971b, 「わが国における運動部の成立と変遷」『体育の科学』21(11), 684-

687 頁.

桑原三二 1988, 『中等教育史研究第三集 旧制中学校の校友会 (学友会)』 三冬社.

日下裕弘 1996, 『日本スポーツ文化の源流』 不昧堂.

小島享 1978 「明治期における兵庫県中学校の校友会運動部について」『神戸学院大学紀要』 8, 141-167 頁.

古園井昌喜 1978, 「明治期における福岡県のスポーツについて」『下関市立大学論集』 22(2), 1-19 頁.

真栄城勉・高木儀正 1986, 「愛媛県における近代学校スポーツの発展過程 - 旧制松山高等学校の校友会運動部 -」『琉球大学教育学部紀要』 29(2), 179-190 頁.

Mangan, James Anthony 1981, *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School*. Cambridge University Press.

三島良太郎 (琴山生) 1910, 『水戸中學』.

能勢修一 1965, 『明治体育史の研究』 逍遙書院.

西川友之・大川信行・水谷秀樹・中川孝 1992, 「明治期における富中文武会の体育活動に関する研究」『富山大学教育学部紀要』 A-40, 15-27 頁.

大阪府第一尋常中学校校友会 1899, 「體育の急務なることを論ず」『六稜』 11, 3-5 頁.

坂上康博 2001, 『につぼん野球の系譜学』 青弓社.

竹之下休蔵・岸野雄三 1983, 『近代日本学校体育史』 日本図書センター.

谷釜了正 1981, 「学校の運動施設に及ぼした学校衛生論の影響」『日本体育大学紀要』 10, 11-21 頁.

棚田真輔 1978, 「兵庫県の明治期における運動会について (1)」『人文論集 (神戸商科大学学術研究会)』 13(3・4), 241-271 頁.

寺崎昌男 1971, 「明治教育史の一断面 - 学校紛擾をめぐって」『日本の教育史学』 14, 24-43 頁.

富岡勝 1994, 「旧制高校における寄宿舎と『校友会』の形成」『京都大学教育学部紀要』 40, 237-246 頁.

鶴岡英一 1973, 「明治における広島県中等学校の校友会運動部について」『体育学研究』 18(1), 9-22 頁.

渡辺融 1973, 「F.W. ストレンジ考」『体育学紀要』 (東京大学教養部体育研究室) 7, 7-22 頁.

渡辺融 1976, 「明治期の横浜における外国人スポーツ・クラブの活動と日本のスポーツ」『体育学紀要』 (東京大学教養部体育研究室) 10, 1-33 頁.

渡辺融 1978, 「明治期の中学校におけるスポーツ活動」『体育学紀要』 (東京大学教養部体育研究室) 12, 1-22 頁.

- 渡辺融 1983, 「ベースボールから野球へ—中馬庚の仕合規則に見られるベースボールの日本化—」『東京大学教養部紀要 比較文化研究』2, 1-54 頁.
- 柳田國男 1976, 『明治大正史 世相編 (下)』講談社 (学術文庫版).